

平成27年度第2回ミセスカレッジより

－私が私らしく生きる為に、あなたがあなたらしく生きる為に、本当の自分を理解してもらう為に－
 －結果として、今いる場所が居心地良く幸せな場所になる為に－
 －子育てに、人間関係に悩んでいるすべての人の為に－

学校法人 高杉学園 ゆりの樹幼稚園 高杉美稚子

昨年度から、今一度、「感動することで、心を育てる」というゆりの樹幼稚園の教育の原点に立ち返り、「ミセスカレッジ」でお話した内容について掲載致しています。「ミセスカレッジ」4回シリーズの最後となります。さて、秋号に引き続き、冬号もミセスカレッジ平成26年度第2回の内容です。実はこれはもうすでに保護者の方にお渡ししている「ママはセラピスト」や「美しく生きる為に」で述べていることです。参加された方は復習のつもりで、そうでない方は特に大切なことを確認する時間にして頂けると嬉しいです。

この続きは「よい子のふりと演技の違い」「人間の発達レベル」です。
 それは全て感情を受け止めてあげているかに起因します。

Arika.

1、感情はどのようにして育つのか

私達大人は、子ども達に良い子に育ててほしいあまりに、色々な要求をしてしまいがちです。「片付けなさい」「きれいにしなさい」「靴をそろえましょう」「お話を聞きなさい」「親のいうことを聞いてね」「静かにしなさい」「さっさとしなさい」「人に優しくしなさい」「思いやりをもちなさい」子どもに期待をしていないといいつつも、数え上げたらいくつになるのでしょうか。

しかし、残念なことに、大人が言うとおりに子どもはするのでしょうか。言葉で伝えれば、子どもに伝わるかといえそうですがありません。この中でも「片付けなさい」「きれいにしなさい」「靴をそろえましょう」「お話を聞きなさい」「親のいうことを聞いてね」「静かにしなさい」「さっさとしなさい」等は、目に見える行動なので、大人にも分かりやすいものです。

でも「人に優しくしなさい」「思いやりをもちなさい」という「優しさや思いやり」はその意味自体がわからない子どももいれば、またその捉え方が同じではないし、大人の前だけどう振舞えばいいかもわかっている子もいて、本当の実態は他人には見えにくいものです。これは「優しさや思いやり」というものが物を片付けるというような目に見える行動ではなく抽象的なものだからです。ではどのようにしたら、「優しさや思いやり」は育つのでしょうか。

赤ちゃんは、オムツが汚れた時泣きます。お腹が空いた時泣きます。ママがいなくて淋しい時も泣きます。それこそ火がついたように泣きます。「オギャー。あーめんどくさい」「オギャー。あーけだるい」「オギャー。人が笑うから泣くのを止めよう」なんて赤ちゃんは一人もいないはず。生まれた時から、人間は感情をなくしてなどいなかったはず。もともと、豊かな感情を生まれもっているのです。

ではなぜ、感情を押し殺したり、苦しいのに、苦しいといえずに、「お母さん大丈夫だよ」と言ってにっこり笑って、でも、リストカットしてしまう子どもになるのでしょうか。

そこに親や教師の子育てのあり方が関係してくるのです。赤ちゃんはオムツをきれいなものに変えてもらって不快な気持ちを心地よいものに変えてもらった時、安心して泣き止みます。お腹が空いて嫌だった時、ミルクをもらって機嫌を良くします。ママがいなくて淋しかったけれど再び抱っこしてもらって安心して眠ります。「不快を快」に変えてもらうときに、自分の存在を受け止めてもらえたと感じ安心するのです。そこに人との間に基本的信頼感が芽生えます。親のかかわりでもっとも大切なことは、精一杯の愛情を注ぎ、その存在そのものを受け止めてあげること。基本的にはやはりこのことが感情を育てる為に根底に必要なことです。

その為には、言葉ばかりでなくスキンシップも重要です。そして次に、その時の気持ちをわかって、言葉に代えてあげることが大切です。「オムツ替えて気持ち良かったねえ」「ミルク飲んだから気持ちいいねえ」そしてその気持ちよさそうな顔を見て「そうなのー。気持ちいいねえ。嬉しいねえ、そうなんだあ。楽しいね」という気持ちを引き出して言語化してあげるのです。

言語化されることによって子どもはこれが「嬉しい」ということ、「楽しい」ということがどうゆうことなのかを会得していくのです。自分の感じていることを、適切に言語化して表現してくれる大人が周りにいないと、子どもは、どうゆうことが嬉しいのか、どうゆう事を楽しいというのかを理解することは出来ません。

そうすることで初めて他人との共通の「嬉しい、楽しい。」を理解していくのです。

感情に気づく・10E
感情はいつかして育つか

赤ちゃんの様子・育ち
親もそう育てられた
問題のこともない
受けとめて生きていく
ことが大切

だから、子どもには「その子が本当はどう感じているのか、
どうしてほしいのか」という感情を引き出す言葉かけが一番大切なのです。



「嬉しい、楽しい」というポジティブな感情と同時に「悲しい、辛い。」という気持ち、感情も受け止めてあげるのはもっと大切です。でも、まずは、この瞬間受け止めてあげるだけでいいのです。「辛かっただね。」とただ受け止めてあげると、子どもはネガティブな感情も出していいんだと感ずることが出来ます。ネガティブな感情も出していいと感ずることが出来た子どもは、辛い時、「辛い」と親に言えます。辛いときは辛い顔、嬉しい時は嬉しい顔が出来るのです。

そんな子どもは、本当は辛いのに、言えなくて顔は笑ってリストカットするような子どもにはなりません。だから親も、気づいてあげることが出来るのです。親にだけは安心して本当の表情を見せることが出来るのです。親の前では子どもは受け入れられると安心していれば悪いことも含めて、何でも出来る筈なのに、受け入れてもらえないからこそ不安で、今は逆に親の前で良い子が増えています、これが「うちの子に限って」という現象ですが・・・

私達大人は、子どものポジティブな感情は受け止めやすいのですが、ネガティブな感情はどうしても、「なんでそんなこと言うの？そんなことは言わないの」と否定しやすいのです。

そして「どんなに親が愛していても、愛されなかった」と子どもは感じていきます。親に嫌われることを恐れている子どもは気持ちを分かってもらえていない子どもです。分かってもらえている子どもは安心して「うるさい、お母さん嫌い」と言えます。親に自分の嫌なところも出せるのです。そのことが言えた時は、子どもはすっきりとして母親に憎しみを残しません。嫌いと言えた時は20年後には普通の当たり前のことを当たり前と感ずることが出来る大人になっているでしょう。もちろん、そういう感情にさえならなかったらその子どもは、仲間からもっと信頼されているでしょう。でも、その感情を押し殺してしまった抑圧されたみせかけの良い子は、切れるか、うつになるか、ひきこもるか、挫折するしかないのです。

また一方で、ネガティブな感情を、そのまま受け止めずに、子どもが体験することでそこから何かを学ぶ前に、親がいつも何とかしてあげようしたり、体験を排除しようとした場合は、子どもはネガティブな感情を出すことで、親に愛してもらえると非意識化で学習し、いつも辛い、悲しいと感ずたことばかりを親の前に出して問題化してしまうようになることも知っておく必要があります。だからまずはその気持ちを受け止めるだけにしておくことが大切なのです。

受け止めてわかった上で、自分が代わりにするのではなく、排除するのではなく、子どもにとって必要な体験を「やってごらん」と自分でさせて、行動することを見守る、励まして援助することが親の役目です。見守る、待つ姿勢を持つゆとりが大人に必要です。そこで、大人が待てないで、見守れないで、子どもが学ぶ力、成長する力がないと勘違いし、つい手を出してしまうのは何故か、それは後で親が子育てで直面する問題のところでも述べます。

「嬉しい、楽しい、悲しい、苦しい」をわかってもらえた子どもは、嬉しそうな顔の子どもがいれば一緒になって嬉しがるし、悲しそうな顔、苦しそうな顔の人がいれば、相手の苦しさや悲しさが表情を見ただけで手に取るように理解でき、手を差し伸べることが出来るのです。

自分が親にわかってもらって自分の中に育っている感情だからこそその思いやりが示せるのです。これが「思いやりであり優しさを育てること」なのです。そして、小さな子が、泣いたら親は自分の感情が出せた、これでよかったと思うことです。むしろその感情を出せる場を作ってあげるのが子育てでもっとも大事なポイントなのです。これは、本園の心の教育につながるものです。説明会などで何度もお話していることですね。

2. 答えは全て自分の中にある —子どもは親の鏡— シンプル イズ ベスト

これまでは、お母さん自身の問題と向き合って頂きました。話を聞いて、子育ては難しいと感ずられたかもしれません。さらにお母さんの悩みが増えたかもしれません。

そして、問題を解決していくには、不安なことにふたをして見ないでいては、そこから逃げていては解決できません。自分の問題と受け止めてこそ、問題の解決の糸口を自分で見つけられるし、腑に落ちる結果につながるのです。自分の問題は究極自分で乗り越えないと解決しないのです。馬を水のみ場まで連れて行っても、馬が自分で飲もうとしない限り馬に水を飲ませることは出来ないという話です。自分の体で感ずて、体ごと納得しない限り、私達人間は、究極の所変われないし、成長しないのです。向き合って、自分の力で感ずて、気づいて、小さな決断を重ねるからこそ、それが、親としての自信につながっていくのです。

子どもの問題で悩むとき、それは親自身の問題であることが多いのです。子どもの育ちの姿が心配なときでさえ、それは親の不安を子どもの中に見ている（これを心理学用語では投影というのですが）だけのことが多いのです。子どもの問題ではなく、親自身の問題だったりするのです。だから、子育ては親育て、そして子どもは親の生き様、その姿を映す鏡なのです。だから、子育ては時としてしんどいのです。でもそのことに向き合わない限り、解決しないのです、それこそが自分自身の問題だからです。

シンプル イズ ベスト

いつもどのような
真理もシンプルである



そして、またやんちゃな子ども、おとなしい子ども、いろいろなタイプの子ども達がありますが、どんなタイプの子どもであれ、問題の子どもは一人もいないからです。問題の大人（親・教師）がいるだけなのです。でも私達大人も以前は子どもでした。ということは、私達に問題があるとしても、それは親の育て方だったのです。でも、その親もまた子どもだったときがあり、その親に育てられたわけですからそう思うと、今、自分の親を恨んでいる方がいらっしやるとしても、自分の親を許せるでしょう。自分の親の問題で辛い思いがあればあるほど、子どもであったあなたにそうせざるを得なかった親の気持ち、苦しさ、辛さも理解できるでしょう。

でも、もし仮に、自分の親が理想の立派な親だとしても、それが嫌で反発してぐれてしまうこともあるし、とてもひどい親だったとしてもそれが嫌だったと反面教師にしてそんな親にならないでおこうと育った子どももいるわけです。そうするとやはり、目の前にある問題をどうとらえるかは自分次第ということに帰結するのです。すべては自分の問題となってくるのですね。だから、苦しくても自分と向き合って成長していくことが必要なのですね。



人生に何もなければそれはそれで幸せかもしれません。でも人生に何も無いなんて事はありえません。だから何があっても最後まであきらめなくて、苦しくても、悲しくても、それを乗り越えていく人間に育てることが大切になってくる、これは、とりもおさず、吉塚ゆりの樹幼稚園の教育理念に繋がっていくわけです。

そして、**心理学の根底は「過去と他人は変えられない。自分と未来は変えられる」が基本**です。だから、親が自分の問題と向き合い、変わらない限り、子どもは変わらない、でもだからこそ親が変われば子どもは変わるのです。

そして心理学者、**アサジオリの言葉を借りれば、「すべての答えは自分の中にある」**のです。どんなにいいアドバイス、お手本があっても自分が感じない限り、自分の物にはならないし気づいたり受け入れたりは出来ないのです。

答えはすべて自分が持っているのです。自分の苦しみや、悲しみに直面して、そのことに気づかないかぎり、答えは見えてこないのですから……。色々な人や本がどんなに良いことを教えてくれ、私達が進む道を示唆してくれても、自分がその道を進みたい（**進むべきではなく進みたい**という気持ちが大切。人生はShouldからWillへの転換が大切。他人がどう思うかを気にした**「すべき」から「自分がどうしたい」**のかという切り替えが大事なのです。）と思わない限り、前や目標に向かって進むことはないし、究極他人のせいにして、自分で責任を取らない、そしてどうしていいかわからなくなるのです。その答えは自分の中にしかない、自分で腹をくくって見出すしかないからです。でもそうやって悩み、苦しみ、気づき、受け入れ、行動したその向こうには、必ず、希望があります。勇気が持てます。自分で答えが出せるのです。自己決断できるのです。これは

また、吉塚ゆりの樹幼稚園の「自立の循環」の教育方針につながっていきますが……

だから、自分の問題と向き合ってくださいたまじめなお母さんほど苦しいでしょうが、子どものために、そして究極は自分の成長のためにもう少し、お付き合いください。



3、子育てを辛いことも含めて楽しむこと

では「真に子ども自身にとってよい子」であってほしい、この子育てを実現するにはどうしたらいいのでしょうか。

実はもうここまで読んでくださっているだけでお母さんとして合格です。だからそのことをまず自分で自分をほめてあげることから始めましょう。どんなに、今、だめな親だと思っていても、そのダメだと思っているからこそ努力しようとしている、そのことを認めてあげましょう。

なぜなら、では、もしも、理想の子育てがあったとして、そのようにやらなければと完璧にこなして、理想通り子育てが出来たとき、子どもの感情の発達は支障をきたすことになるからです。理想の子育てをしているとき、親は、親の理想に目が向かっていっているのであって、子どもを見ていない、子どもの声を聞いていない、ことになるからです。

子育ては、子どもをよく観察することから始まるのです。「手を出さず、目耳を離さず、口を出さず」が子育ての基本といわれていますが「目耳を離さずというのは、しっかり、見ること、声を聞くこと」です。子育ては、だから感覚なのです。頭でこねくり回して帰らない過去を後悔し、起きるかどうかもわからない、未来を心配するのではなく、「今、ここで起こっていることにしっかり、耳を傾け、目を向けることなのです。」子どもの反応を見てその時、その時親が感じて、言葉をかける、あるいは、そっと見守り、わかってあげていることが必要なのです。子どもが望んでいることを望んでいるだけすることが保護だけれど、子どもが望んでいないことまで手を出すのは過干渉になる。つまりは、保護になって子どもに感謝されるか、過干渉になって子どもにウザイと思われるかは、子どもが望んでいるのか、望んでいないかにかかっているのです。とすれば、子どもをよく見る、子どもの声に耳を傾ける、そしてその心の声を分かってあげるしかないのです。

でも、こんなに子どもの事を考えている、まじめなお母さんこそ、「こんな話を聞いたら、出来ない、難しいよね」と思ってしまうのです。

なので、まじめなお母さんほど、思い悩み、子育てを楽しめなくなり、すっかりくたびれてしまう、そして拳句に、子どもの教育はどうしたらいいか分からなくなってしまうのです。

子育ては、心配、不安なことだらけですね。子育ては難しい、そう思うのも当然かもしれません。だって未来はどうなるかわからないから余計に不安ですね。厳しくしてもいけない、甘やかしてもいけない。ではどうしたらいいのでしょうか。

答えは、私はひとつではないかと思うのです。この時期の子どもに育てたいものは何なのかしっかり把握した上で、後は、親自身が徹底的に「**子育てを楽しむこと**」です。お母さん自身が自分自身に無理を言わないようにすることも大事です。

子育てで私がお話ししていくことをやれることだけでいいので、自分がやれると思うことだけを少しずついいので実行しましょう。必ずよかったと思える日が来ます。

今回、「子育て」で大切なことは新しい「**ゆりの樹幼稚園の10E**」に全てを盛り込みました。子育ての育てたいことの基本がここにはあります。人生で大切に生きてほしい、人間としての生き様の根底を盛り込みました。そして、子育てでぜひやってほしいことはつぎのことにつきます。親が子どもの、ポジティブな声も、ネガティブな声も同時に受け止めること。そのためには、聞き上手になることです。その上で、親が先に先に行動しないで待つ。見守っているから、自分でやってごらんと背中を押す余裕を持つことです。

そして、聞き上手になるためには子どもの行動を、興味関心をもって楽しむことです。どうして、こんな行動をとるのだろうと、その成長の姿を不思議がって見たり、聞いたりすることです。

大河原先生はこう言っておられます。「**子ども達は、日々生きていく中で、さまざまな辛い体験をする。集団の中で生活をしていれば、けんかもあるし、意地悪もあるし、誤解される事もある。そのような子どもの生活の中である様々な苦難に対して、子どもが辛かった、嫌だった、悲しかった、今日は嬉しかった、と親に話す事が出来れば受け止めてもらえるという関係にある子は、日々の中で感情は豊かにはぐくまれ、同時に「耐性」もついていく。ここでいう耐性とは困難や苦悩を抱え、感じ続けることが出来る力を意味する。そのような子どもは感情が、表情に表出されるので、顔を見れば元気なのか、落ち込んでいるのか掴むことが出来る。よく泣き、よく笑う子は成長とともに耐性・我慢する力も育つ。」**

これは、ゆりの樹幼稚園の方針、「悲しい事、辛いことがあっても、最後まであきらめない心、何があってもそれを乗り越えていく心を育てる」方針を見事に裏付けてくれている理論です。

この理論にめぐり合って、今までの方針が間違っていなかったことを確信しました。だからこそ、ポジティブな声も、ネガティブな声も同時に受け止めることが必要なのです。ネガティブな声を聞いて親が相手の親や子どもに何かをしようということではありません。

受け止めるだけでいいのです。

ネガティブな感情が、社会化（親に言えないで、受け止めてもらえない）されないで、いい子に育ってしまうと、そのエネルギーは何らかの形で、爆発してしまいます。

それは親や教師にとって些細なことであっても、子どもにとっては、過去の激しいし込まれた感情による、大きな意味を持つものになるのです。

自分で決断する「自分軸」ではなく、人の目を気にして「他人軸」で、良い子のふりをして、感情を抑圧して生きてきた結果「あの子に限って」となってしまうのです。

4、子育てはリラックス

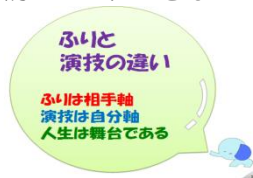
時間はあっという間に過ぎていきます。千紘先生を産んだのは昨日のような気がするのに、もう3児の母です。親が惑っている間も、確実に子ども達は成長していきます。そして、親が親として育つまで、子どもは待つはくれません。どんどん成長し、嬉しさと喜びとともに、新しい悩みも難問も運んできます。子育ては大変、そして忙しい、この巻頭言もゆっくり読みたいけれど、そのゆとりはないというのも本音かもしれませんね。私も同じ道をたどってきました。幼稚園をしながら、子育てにも幼稚園の教育にも悩み、苦しみ迷いながら、そしていつも自分はこれでいいのかと自己と向き合いながら・・・

向き合ったからこそ、見えてきたものが多かった、苦しんだからこそ、子育てから学ぶことができた、そして同時に、楽しんだからこそ共に育ったとを感じるのです。

子は親を映す鏡でした。この子がいてくれたからこそ、親でいられる、それは感謝以外の何者でもないのです。

そして、子育ては過ぎてみれば、本当にあっという間、こんなに母親が輝いているときはないのですよ、お母さん。だからもっと楽しんでおけばよかった、忙しいなんて思わずに、もっともっと、大切に、大切に過ごしておけばよかったと、今、思うのです。

だからこそ、私は、これまで学んできたことをせめて吉塚ゆりの樹幼稚園の保護者の方には伝えたいのです。私がどんなに伝えようとしても、受けとめる側がその気持ちになければもちろん何も伝わらないのですが、読んでくださる方がどう思うかではなく、また**教育者としてすべきではなく、私が伝えたいのです。たとえどのように受け止められようとも、私は私が伝えたいという気持ちをしっかり持ってさえいれば、読んでくださればもちろん嬉しいですが、もしも読んでくださらなくても、私が伝えなかったのですから、伝えたことで私は満足するわけ**です。私がこんなに伝えようとしているのに、読んでくださらないとか、相手を恨んだり、批判したり、読むことを強要したり、書くことへの見返りを求めたりはしないのです。自分が自分に立脚して、自分の足で立っていれば人を恨むことはなくなります。人のせいにすることはなくなるのです。これが「私が自分で自己責任を取る」ということです。



いつも、いつも他人の悪口を言い、他人を悪者にしていないと、自分が自分でいられない人は自分の人生に責任を取っていないのです。他者責任にしている間は問題は解決しません。思考がぐるぐる同じところを回って、時間ばかりたち、自分も他者も疲れ果てさせるだけです。子育ても同じなのです。他者責任にしない、自分で選択して、自分で決定し、自分の感じたことや言動、行動に責任を取る、自分の人生は自分で腹をくくるしかないので。そして他者に対して見返りを求めない、このことがまさにすべての人に対する「無償の愛」なのです。

千紘先生はもう20年間バトントワリングをしています、彼女の一番のファンはいつも私でした。大会には全てカメラを持って出かけました。高校生頃になると、あの頃の年齢特有の照れからか『恥ずかしいから、もうこないで。写真を撮らないで』と言われたことがありました。その時、私はこう言いました。『恥ずかしい思いさせてごめんね。でもお母さんが撮りたいから撮っているの。あなたのためではないの。お母さんが撮りたいの。だから勝手に撮らせてね。なるべく目立たないようにするからね。』それに対して、千紘先生は何も言いませんでした。私が撮りたいから撮っているのだと言われれば、反抗の余地がなかったからです。

では、私がもし「**あなたのためにしてあげているのに喜んでくれると思っていたのに何でそんなこと言うの。**」と言っていたらどうでしょうか。『私のためならもうしないで』とか『いつもそうやって人のせいにして』『誰も頼んでない』とか余計に反発されたでしょう。

これだけしたのだから喜べとか、こうあるべきだと思っている時は必ず、こんなにしてあげているのに、と「**のに**」が先に出てしまいます。それに対して、自分がどうしたいのかと、自分に軸足を置いて行動していると、「**のに**」は出てきません。喜んでくれたら嬉しいけれど、私がしたくてしているのだから、相手がどう思うかは関係ないのです。これが見返りを求めないということですね。

子どもはその笑顔をくれただけで、5歳までに人生のすべての親孝行はしてくれていると言われています。それだけで十分なのです。子育てに見返りを求めないことです。そして、覚えておいてほしいことは『**子どもはやがて大人になる**』と言うことです。やがて、母親の年齢になった時に『ああ...母親はあの年齢で、こんなことをしてくれていたのか、言っていたのか。』と気が付き、感謝するのです。



実際、千紘先生も社会人になって、『こんなにバトントワリングの写真があるのは私だけ。

目に見える思い出があるっていいね。』と言ってくれたのでした。親が感謝されるのは、子どもが親の年になった時でいいのです。子どもはやがて私と同じ年齢になる、いつか気が付いてくれる年齢が来るのです。その時でいいのです、感謝されるのは。だから子育てはながーい道のりなのです。だから焦らないことです。どーんと構えていけばいいのです。

子育ては、本当に心配、不安なことだらけですね。子育ては難しい、そう感じるのも当然かもしれません。なぜならば、子育ての結果が出るのは遠い未来だからです、人は未来を心配するとき、不安になります。過去に思い煩うとき、後悔をします。心が未来や過去にいる時、不安や後悔にさいなまれ、人は緊張するのです。リラックスできないのです。そしてまた同じ失敗をするのです。

だからこそ「**今ここにいて、目の前に見えていることをしっかり見て、聞こえていることをしっかり聞いて、今ここで感じていることをしっかり捉えて、今自分にできることをできるだけいいから、精一杯やること**」以外に、この見えない不安の呪縛から逃れることはできないのです。

心理学者の「ゲシュタルト」は生きるために何もする必要はない。人間はすでに人間としてその能力をすべてもっている。問題は自分の能力を止めてしまっている状態に気づかないことである。」と言っています。

見たいことを見ないようにしたり、嫌いな人の話を聞きたくないと、聞かないようにしたり、感じたいのに、感じないようにしたり、言いたいのに言わなかったり、我慢をして抑圧したりしてしまうから、自分と違う自分を演じるから疲れてリラックスできないのです。抑圧してしまうとその抑圧は変な形で現れるのです。そして相手を傷つけるか、自分を傷つけるしかなくなってしまいます。それは自分らしさとはかけ離れていってしまいます。そして、ますます自分が嫌いになって自己否定へとつながるのです。そんな自分が嫌で、またそんな自分を見ないようにしたり、隠したり、ふりをしたり、どんどん本当の自分ではなくなります。

拳句は本当の私はこんなではない、誰も私を理解してくれないとリストカットをするに至るのです。フリをしないことです。いい人のふり、悪い人のふり、フリをしていると疲れます。

そして、こんなに私が合わせているのに、気を遣っているのに「あなたは何？」と、相手を恨んだり、他者否定をしたりすることにもつながります。



本当の自分を出さないで、本当の心と心が触れ合っていないで、自分で自分が違う人を演じているのに、分かってくれないと相手を恨んでもそれはお門違いというものです。（本当の自分を出すということは、わがままにするということではなく、自分の心に素直であるということです。）でももし、相手に気に入られようと違う自分のフリをして拳句に嫌われたのなら、こんなに合わせていたのにと、もう自分でもどうしようもなくなるわけです。合わせなければ嫌われる、無理に相手に合わせていてもそんなところがいやと嫌われる、どっちにしても嫌われるならば、自分らしくいた方がいいですね。もし本当の自分を出して嫌われるのなら、それはそれで、踏ん切りがつくというものです。

もし本当の自分を出して嫌われたのなら、それは仕方がない、その人は自分とは合わなかったのだとあきらめる潔さがあります。もちろん、周りの人皆に嫌われるより、うまくいった方がいいですから、本当の自分でいて、好感をもたれるように、内面から自分を磨くことが必要なのです。そして最後には本当の自分が自分で居心地のいい人になるように努力すればいいのです。それが本物になるということです。

だから、自分の人生は、人がどう思うかではなく、自分がどうしたいか、自分の人生のシナリオは自分で作る、自分の足で、この地球に立って、大地にしっかり足を着いて自分の足で歩くことが大切なのです。子育ては、この時期の子どもに育てたいものは何なのかしっかり把握した上で、また多くの知識やコミュニケーションスキルを学んだ上で、後は、親自身が徹底的に「**子育てをそして人生をリラックスして楽しむこと**」が大切なのです。

子育てではよく質問が出ます。運動ができる子にしたい。勉強好きの子どもにしたい。どうすればいいのでしょうか。体育好きにしたいお母さんなら日曜日朝早くに起きておにぎりを作って公園に行ってお母さんが子どもと一緒に運動を楽しむことです。

勉強好きの子どもにしたいなら、お母さんが本を好きになることです。親が、運動が嫌いで、本が嫌いで、そのことを楽しんでなくて子どもが好きになるはずはないのです。一緒に楽しんでいれば子どもは自然と、好きになります、好きになればやり続けます。そして結果として上達するのです。大人が大人であることを楽しんでいなくて嘆いていたら誰があんな大人になんかなりたいと思うでしょうか。あげくにニートの増大です。早く大人になってお父さんのように思う存分運動がしたい、お母さんのように本を読みたい、働きたいと思わせる大人で、私達がいかにあるかにすべてはかかっているのです。

『親の言うことは聞かないけれど、する通りにするのです。』子育てはすべて模倣なのです。大人の責任は大きいですね。いつも子どもに見られている、だから、子育てはその意味で大変です。だからこそやっぱり回りまわって大人が一番子育てをリラックスして楽しんで、面白がっていることが大切なのです。子育ては大変だといえど、子どもは大人になりたがらないでしょう。これからの子どもは子どもを産まなくなるでしょう。そして社会全体が困った方向に進むことにもなるでしょう。

子育てでリラックスするためには、『80%主義でいこう』がキーワードです。完璧さを目指す生真面目さをなくしましょう。生真面目さは時として、息苦しく、神経質になりがちです。親の欲求を100%押し付けていては、要求水準が高すぎて子どもが疲れてしまいます。子どもには子どもの人生があるのです。尊重するべきところは尊重し、注意すべきところは注意すること。『足る事を知る』が80%主義のキーポイントです。



人とむやみやたらに比べる事もやめたいものです。特に成績、本当の学問や仕事は自ら築き上げていくものであり知識はあくまでも人間としてのベースでしかなく、発想力や判断力、行動力が伴わなければ、話にはなりません。又、他の家と比べる事、他人の悪口を子どもの前で言うこともリラックスできないお母さんのやりがちな事ですが、それも無意味です。他と比べる事よりも、自分の家庭、家族らしさを築く事が大切です。つい追い詰めるような言い方もしてしまいがちです。追い詰めないで、逃げ道を作りながら叱ることが大切です。

生真面目すぎるお母さんは、お父さんとも陰にこもった喧嘩をします。たまに小さな喧嘩をしながらガス抜きをしましょう。その時、肉親の悪口を言わない、肉体的欠陥を言わない、プライドを傷つけないことに注意しましょう。そして、『ごめんなさい』の一言が言える時間と余裕を相手に与えてあげるようにしましょう。

一番にこのタイプのお母さんに、持ってもらいたいものは、ユーモア精神です。少しのユーモアが子どもに余裕を与えます。たまには、子どもの前でドジをしてみましょう。何にでも興味、好奇心を持ちましょう。子どもとお父さんに『感謝状』や『努力賞』をあげてはいかかでしょう。遊び心を持っているお母さんを見てると大人っていいなあ、早く大人になりたいな、人生とは楽しいものだと思わせられたらしめたもの、なんと素晴らしいお母さんでしょうか。そして、子育ての最後はやっぱり見返りを求めない事です。子どもには、5歳までの愛くるしさで一生分の親孝行は全てしてもらっているのですから。

なかなか難しくてこんな事は出来ない、の声が聞こえてきそうですが、自分の悪いところは棚に上げて子どもだけ変えようなんてのは虫がよすぎるでしょう。この話を聞いて、出来ないとかえっていらいるくらいなら聞かない方がましです。でも、時すでに遅し、お母様は話を聞いてしまいました。聞いてしまったのなら、1つでも実行する事。それでもやはり、出来ないと思うなら、自分の状態にだけでも気付く事、そのことを知っていれば、敢えてそれに徹するもよし、そのことに気付いていない事が一番怖いので、今日はそれに気付けただけでもうけものと考えましょう。

5、自分の言葉使いに気をつけてみるー「でも」をいわないー

子どもになにか注意をしたり、促したりする時ついこんな言葉を使っていませんか。『〇〇ちゃんはやさしくて素敵だね。』『でも』これからはもっと強くなくてはいけません。こういうようにつなぎ言葉に「**でも**」をいれるとその前のことが全否定されてしまいます。せっかくやさしくて素敵だねといっていることも否定になるのです。「これからは強くなくてはいけません」より、否定されたほうが体に入っていきます。そして、「**でも**」以降のことは耳に入っていないので、

③でも→そして にかえる

あなたは優しい、
でも、これからは強くならうね
→あなたは優しい、
そして、
これからは強くならうね。

ではなんと言えいいのでしょうか。これからは「でも」ではなく『そして』を使ってみましょう。

『〇〇ちゃんはやさしくて素敵だよ。そしてこれからはもっと強さも身につけようね』



いかがでしょうか。今までも素敵だけれど、これからはさらにどうしたらよいかということが、定期的に体にしみこんできませんか。今までの自分も否定されないから、そして以降のことが体にすんなり溶け込んで来ます。何より否定されていませんから、素直に次の文章を受け止めることが出来るのです。これからはどうぞ、どんなときも『そして』とつないで、さらにパワーアップできるようにしてあげてください。次にどうしたらよいかを受け止められるように、次につなげられるようにしてください。

同時に自分にも『そして』を使ってほしいのです。物事にはすべて両面性があります。優しい人は、優柔不断かもしれません。強い人は、傲慢かもしれません。頑固な人は、揺るがない人かもしれません。コインに裏表があるように、物事は見方を変えれば、良い面も悪い面も同時に存在します。例えば『ほめる』ということはとても大切ですが、いつも、いつもほめていて、100回の内たった1回ほめてもらえなかったことを恨んで、母親は自分をほめてくれなかったと思い続けるかもしれません。一度もほめてもらえなかった子どもが、頑固な父親がたった1回ほめてくれたことを、あの父親がほめてくれたのだからと心にしみて一生大事な思い出として感謝し続けるかもしれません。そうすると『ほめることはほめないこと。ほめないことはほめること』につながり、同じ言葉にも両面性はあるのです。

「でも」ではなく、「そして」を使うことによって、私達はこの両面を同時に自分の中に感じることが出来ます。『私は嬉しい、でも淋しい』と自分に言ったとき私達は嬉しいことを全否定して今、淋しいことに焦点を当ててしまいがちです。嬉しいことだけ肯定して淋しがってはいけなと自分のある一部分を否定してしまうのです。

『私は嬉しい、そして淋しい』といえれば自分の中に嬉しさと淋しさが同時にいることが出来ます。

私も、千紘先生の結婚の時がそうでした。嬉しい私がいたら淋しがってはいけなという禁止令が自分の中に出てくるのかもしれませんが、そして嬉しいフリだけをして淋しいという感情を閉じ込めてしまいました。それが 私をしばらくの間見かけはとっても嬉しくてハイだけれど、本当の内面はブルーにしていました。

人間は往々にして白でなければ、黒でなければいけないと思いがちです。『勝つか負けるか』『良いか悪いか』もそうです。一方の自分を認めても、一方の自分を否定している間は、自分を好きになることは出来ません。『勝つ時があってもいい。そして負ける時もあっていい。同時に、勝つことは時に良いことではない時もあり、負けることはいいことではない時もある。』なのです。自分の中に自分を否定するものがある間は、自分のことを好きになれるはずはないのです。

嬉しい私と同時に淋しいという私がいってもいいんだと自己肯定できた時、楽になるのです。リラックスできるのです。私も、嬉しいことと淋しいことは相反するものだけれど、それを同時に心に受け止められたときに、心が安定してすっきりし心があったかくなったのです。

私達は、頑張っている時に「頑張りすぎてはいけな」と、頑張っている時の否定的な面に焦点を当て、頑張っていない時は、頑張らない自分はだめだと、頑張っていない時の否定的な面に焦点を当てて落ち込んで、自分が自分を不安にさせがちです。

そのどちらか一方にいて、不安になることが多いのですが、どちらかに行きがち人は両方にぶれるのです。ぶれることで平行を保つのです。だからぶれる人の周りには居心地が悪いのは当然です。

頑張れなかった時は、今日は休養が必要だった、明日から頑張れる、と頑張らなかった時の良いほうに焦点を当て、頑張った時は、ここまで頑張ることができたと、頑張った良いほうに視点を当てると、自分がどの位置にいてもその自分を認めることが出来ます。実は、頑張りすぎたとか、サボりすぎたとか、片方にぶれていても、これでよかったと、そのことを認めたときに、真ん中の軸、揺るがない自分になっているということなのです。だから不安ではなくなるのです。これは不思議な感覚です。体験すると理解できます。

たぶん私が仕事をやめるとき、『楽になる、でも淋しい』ではいつまでも、未練たらしくなるでしょう。「楽になる、そして淋しい」を同時に受け止められたら、自分らしい引き際になるでしょう。そんな気がしているのです。欠点や不調和の部分の何とかしようとして走ったり、カんだり、ときに立ち止まり、歩いたり、自己内対話を楽しみながら、同時に苦しみながら、自分の居場所やあるべき姿を求めて模索しながら生きてきました。そして、模索しているときはまだ若いし、苦しいし、だからこそそのときが一番輝いているのかもしれませんが。

もうこれ以上あがいても、欠点を直せる年齢ではなくなって、日ごとに体力の衰えも感じずにはいられない年齢がやがてやってきました。人間に平等にやってくるのは、老いと死です。今、この年齢になって本当に感じるのは、人間が美や魅力を感じるのは、必ずしも左右対称の均衡が取れたものや完全無欠のものばかりではないということです。

人はみな完璧ではありません。なにびとにも必ず欠点があります。でも欠点そのものが魅力になる時もあります。欠点があるからこそ、味がある、人間はどこか抜けたところがないと面白くもないものと思うのです。その足りないところをひとつの魅力にまで高めることが出来たら本物であるし、夫婦関係も含めて相手の欠点こそが大好きになれば、こんな深い結びつきの人間関係はないと私は思うのです。

不調和や遊びの部分というのは結局のところゆとりではないでしょうか。創造性や人間性、根性といったものは、むしろ不調和の中で育っていくのです。この事が自分の中にしっくりくるということは、これから、確実にやってくる「死に向かっていかに生きるか」という答えが私の中に見出せるような気がしています。またそれは、精神力も体力も確実に衰えてくる、すなわち自分の中の不調和が増えてくる、「老い」も確実に受け入れることが出来ることにつながるのではないかと感じています。

その目標を達成に近づける為に実現可能な小さな行動こそ、物事の両面を同時に見る事が出来るようにすることです。具体的に分かりやすい例で言うならば、オードリー・ヘップバーンの顔のしわが晩年美しいといわれましたが、外見の美しさではなく、心持ちこそが老いるごとに魅力を増していけたらこんな幸せなことではないように思います。またその心の美しさ、成熟は表情にも表れ、結果として外見が魅力的になる事は更に素敵なことです。

人づきあいにおいて40歳までは顔で選ぶ、40歳を過ぎたら顔で選ぶ、40歳過ぎたら顔が履歴書といわれるのも、その人の内面が外に表れるからでしょう。本当に内面が魅力的な方は、表情が生き生きとして美しい、男の方でも風格がただよっています。

物事には見方を変えれば、必ず良い面と、悪い面があります。その両面を同時に人にも、自分にも、事象に対しても見る事が出来るようになればどんなに楽に生きれるかと思うのです。そして、それは新しい気づきを与えてくれるでしょう。調和と不調和の双方が混在する、そしてそのことが魅力になっている人間、そしてそんなこれからの人生でありたいと思います。

そのために、『そして』は物事を同時に両面から見る事が出来るようになる魔法の言葉です。

物事の両目にある良いことに視点を当てる事が出来る言葉です。物事の両面の良いことに視点をあてることが出来れば、失敗の、失敗の、失敗の先には必ず成功が待っているのです。その意味では失敗はないのです。白のときは白のよさを認め、黒のときは黒のよさを受け止める、そう考えると不安なことはなくなってきます。

「でも」から「そして」へどうぞ言い方を変えてみてくださいね。たった一言で世界が変わるかもしれません。いえ自分で自分の世界は変えられるのです、自分の世界ですから・・・

さて、ではなぜ、両方を同時に受け止められないか、白のときは白が悪い、黒のときは黒が悪いと思う心はなぜ起こるかといえば、人がどう思うかを気にするからです。自分の中に自己否定の部分が有るから自信がもてないのです。それは「人がどう思うか」が「自分がどうしたいか」に優先しているからです。

人が自分のことをどう評価するかを気にしていたら、相手の言動によって、黒のときは黒が悪かったと感じ、白のときは白が悪かったと感じ、身動きできなくなってしまうか、相手に迎合して揺らいでしまうのです。

人の言動が気になり、振り回されて、自分の人生のシナリオを相手に渡してしまうのです。そして自分がなくなり、不安になり、自信喪失するのです。だから次には自分のシナリオを自分で書くことが大切になってくるのです。さてその方法です。

6. 全ては自分の問題として捉え、自分自身の言動に責任を持つ

子育てで、大切なことは、リラックスし、楽しむことだということについて書きましたが、ここまで学んでも、分かっているけれど、リラックスしたくても出来ない、楽しみたいくても楽しめない方もいます。最後に「自己受容」ということについて考えてみましょう。

どうしてリラックスできないのでしょうか。なぜ楽しめないのか、なぜ不安になるのか、それは子どものことが心配で不安だから・・・よく聞く言葉です。でも本当は子ども自身に不安なことがあるからではないのです。それは自分（親）自身に不安があるから、相手のことが不安に感じるだけなのです。どんな時も、人は他人のことを完全に理解することはできない、他の人を変えることはできない、他の人の責任を取ることはできない、自分は自分のことだけを自分の責任でとることができるのです。

人はいつも自分のことしか語れない、自分の世界からのみ外の世界を見ている、だから自分のことのみ語っている、決して他の人のことを話すことはできない、というのが、心理学のひとつの捉え方です。

人は『過去と他人は変えられない、今と自分は変えられる。自分が変われば相手も変わる』ということもよく言われるキーワードですが『自分が変われば、相手も変わる、だからすべては自分次第』という意味では、人はみな自分の世界だけに生きている、自分のことしか語れないという意味は同じ考え方に通じることです。

今年の巻頭言ではお母様方に自分とずいぶん向き合ってくださいました。自分の問題だと捉えない限り、問題は解決しないからです。子育てや人間関係で、不安にならないためにも、すべてのことを自分の問題として捉えていくことが必要になってくるのです。相手が悪いと他者責任にしている間は、問題は解決しないばかりでなく、自分自身も苦しいのです。なぜなら、他人の責任は究極のところ自分ではとれないからです。

では、自分のことのみ語っているということを、具体的にお話していくことにします。例えば、自分勝手にわがままな人Aさんがいたとします。周りにいる人Bさんが『あの人はわがまま、自分勝手よね』とCさんに言っている場面を想像してください。こんな場合、言っているBさん自身がわがまま、自分勝手の場合が多いのです。なぜかといいますと、Bさんが自分の中にわがまま自分勝手のところがあるからAさんの中の自分勝手にわがままにしていることがわかるのです。もし、仮に自分のなかにそんな場合にわがままにするということがなければ、人のそんなところも気づかないのです。だからそのときに自分の中のわがままな部分が反応して相手の

中のわがままな部分を今見ている、ということになるのです。もちろん、もし、ほんとにわがままな部分がない人がいたとしたら、Bさんがなぜそのように行動するか理解できないでしょう。でもわがままな部分がない、そんな人はたぶんいませんから、わがままが目についてしまうのですが、自分の中にある、同じ感じ方をするわがままな部分が、今は反応しているのだと捉えると、自分の気も楽になりますし、相手も理解しやすいでしょう。簡単な言葉で言えば、自分がわがままな部分があるから相手のわがままな部分がわかるのです。

相手がずるいことをすると思うときは、自分のなかにずるい部分があるから、そのことをずるい行動だと思うのです。反対に、自分の中で、ずるいと思っていることでも相手がそうと思っているのではないときもあるのです。自分がずるいと思っているから、その行為がずるいことにしか捉えられないということになります。

自分が相手を心から信じていれば、相手が自分を信じないということが理解できないので、信じてくれているということを信じることが出来るのです。人が自分を信じてくれない、という言葉を使うときは、自分が相手を信じてないから、相手も自分を信じるはずがない、相手が自分を信じるということが信じられないとうなるわけです。ですから、すべては、自分がどう捉えているか、または、今の自分のなかのどこの部分が反応しているかなのです。

「あの人私のことを嫌っているよね」といっている時は自分がその人を嫌いという部分が反応しているのです。自分が嫌っていなかったら、その人が自分を嫌うなんて思いもしないからです。だから、その人が嫌っているかもしれないというときは私がその人を嫌っているということを言っているのです。「あの人、媚を売っているよね」という時、自分の中にそんな考えがない人は、『え？どうして？そういわれてもあの人のどこが媚を売っているの』と理解できなくて不思議に思うでしょう。自分の中にあることだからこそ、相手の中に同じものを見て反応してしまうのです。だから、私達はすべて自分のことを言っているに過ぎないのです。自分の世界からしか、この世界を見れないのです。だから「**全ての答えは自分の中にある**」のです。

嫌いな人の中にあるものは自分と同じものと思えば、実は、嫌いな人ほど、自分のある一部分に似ているのです。嫌いな人ほど、同じパワーを持っているのです。だから反応するのです、そう思えば、嫌いな人が一度に好きになったりはしませんか。不思議ですね。

だからこそ『**全ては自分の問題として捉え、自分自身の言動に責任を持つ**世界の中心で愛を叫ぶ』ことが大切なのです。自分が愛していると信じていたら、相手が愛してくれていることを信じられるのです、相手が愛してくれてないと思った時、今、自分が本当に相手を愛しているかに気づく必要があります。自分が愛してなければ相手が自分を愛しているなんてことは理解できないからです。

だから、愛することが先なのです。愛されたかったら、愛することなのです。愛することが信じられたら、愛されている確信をもてるのです。これこそが、「世界の中心で愛を叫ぶ」なのではないかと私は感じています。

もちろん人間は、わがままな部分も、わがままでない部分もいろいろな自分が自分の中に存在するのです。人間の心は完全懲悪のようにひとつではありません。いろんな自分がいて、それを中心になる自分がオーケストラのコンダクターのように指揮をとり、自分の音色を演奏しているのです。だから、素敵な自分の音を演奏していくことが大切です。そのためには、自分について知るという学びが必要です。自分とは何ぞや、自分の中にはどんな感情があるのか、何のために生まれ、生きて、死んでいくのか、自分探しの旅、学びが人生なのです。そしてそのことに気づかせてくれるのが、人間関係、特に子育てなのです。だから、人付き合い、子育ては難しい、苦しい、だからこそ、そこから学び成長していけるのです。人付き合いでトラブルがあったときこそ、深く自分と向き合えば、気づきが多いのです。苦しんだなら、そこから何かを学ばなくては損ですね。

7、人間の発達レベルの最終地点ー自他受容

最後にわがままな部分も、わがままでない部分も、自分と相手の中には、こんな嫌な部分も、良い部分もある、これも私、あれも私と気づけた時、そしてそのどの部分も自分と相手の中において良いと思えた時こそ、**自他受容の時**です。どんな自分も受け入れられたら、

こんな楽なことはありません。他の人からどんなに自分を悪いと指摘されたとしても、良いと言われたとしても、それが自分なんだと受け止められれば『そのとおり、それが自分です。だから言われてもしようがない』と淡々と、落ち込むことなく、又のぼせ上がることもなくいられるのです。これが揺るがない人ですね。平常心を持つということですね。その平静な状態だから、相手が言っている自分についての悪い点も良い点も自分にとって本当なのか、相手が言っていることがうそなのかをも客観的に見極められるのです。そして本当に自分にはない点を補えるようになるのです。

最近の子ども達の非行や事件の背景にあるものは自分の感情が今どうなのか気づけないでいること、居心地が良いのか、悪いのか、好きなのか、嫌いなのか、いやなのか、自分がどうしたら良いのかわからない、自分がなくなって自分が透明になっていることに起因していると言われていいます。

こうなる原因は、人の目を気にして我慢しすぎて自分の感情に気づけないか、自分の感情を押し殺していることです。そうすると変な形でどこかで爆発するか、素直に自分の気持ちを伝えることができなくなります。なぜなら、自己肯定できない子どもは、率直でいると、自分のあるがままでいると他者に嫌われると思ひ込んでしまうからです。

●4段階発達レベル●					
	自	I	II	III	IV
他		生存	パワー・カ	所属	自己尊重
I	生存	競争	コントロール	世話する	教える
II	パワー・カ	守る	戦い	降参	無視
III	所属	世話される	忠誠・拒絶	仲良し	中立
IV	自己尊重	孤独	欲求不満 ライオン・コントロール	欲求不満 47474747	平和 自他受容

拳句に良い子のフリ、わかったフリ、やさしいフリ、元気なフリ、明るいフリをし続け、本当の自分、あるがままの自分の姿からはかけ離れて行き、ますます、自分がいやになり、自己肯定感をもてなくなってしまうのです。

ですから、自分の感情に気づき、フリをせず素直に感情を表現し、他者が理解できるように伝えていく力を培うことが大切になってくるのです。それができると、自己への執着がなくなり、他者に向かって開かれてくる。そうすると、他者を理解することにもつながるし、どんな自分も受け入れることが出来るようになるのです。結果として、心がリラックスし、どんなことも楽しんで取り組める大人に育っていくことが出来るのです。それが本当の自己受容につながっていくのです。

「自己受容」とは、相手を信じ、自分を信じ、その場に「身をまかせる」こと。

身をまかせることが出来るとは「自分に捉われず、自分への執着を捨てる」ということ

自分への執着を捨てるとは「外に向かって心が開かれている」こと

外に向かって心が開かれているとは「相手を理解する能力がある・場を読むことが出来る」こと

これこそが、樺で言う「無我の境地」 精神分析で言う「自己受容」です。

このことを実現するためには、**「心と体が健康である」**こと そのために大切なことは

①自分の感情に気づき、その感情を受け止めること、

②自分に正直であること、そのことを率直に伝えること

③勝ち負け、白黒などにとらわれず、物ごとの両面の良い点を見ること

④するべきか否か、いいか悪いか、人がどう思うかにこだわり無理をしないこと⑤見返りをもとめない無償の愛を感じる

日々平凡
それが何よりありがたい
ありがとうと言えた
しあわせな一日

全ては「**ゆりの樹幼稚園が考える教育10E**」につながって行きます。人が人として生きていく上で大切な根本がここにはあるのです。

大樹は根を張りながら上に伸びていきます。人間がそのように自然な成長をするということは、その時々課題を解決しながら成長するということです。その時々課題を解決することで根が生えていくのです。人間を樹にたとえば、根の部分が心理的成長で、土の上に見えている幹の部分が社会的成長です。大樹は根がないと、風が吹くと倒れてしまいます。人と人との成長する生産的対応はコミュニケーションをする、心が触れ合うということです。

その上に自己実現してアイデンティティの確立があり、現実の自分を受け入れ、責任能力が身につきます。

人に迎合したり、攻撃したり、引きこもることなく、自分の内面と正直に向き合い、孤独を恐れず、自分の判断で行動し、その結果に責任を負える人間でありたい、そしてそんな大人に育ってほしい、その思いをこめて今年度も保育を進めてきました。

教育者、親とは自分の教えることに責任をとる、この一点につきます。教育の過程で知識が人間の血となり肉となり、人格を形成していくものだ、ということ子どもに見せなければいけない。これが大きな刺激になり、勉強への意欲が沸くのです。自分の正しいと思った教育を実践する。でも、間違っはいけないのです、その為に努力が必要です。

学童期を経て、やがて、成人した時にこのゆりの樹幼稚園で得たことが、芽を出し実を結ぶものと確信しています。この巻頭言のせめて、どれか1行でもその子育てのお役にたつことを願って今年度最後の大樹通信をお届け致します。

子ども達は、ご家庭での温かさと本園の教育の中で、それぞれに豊かな成長をとげてくれました。あの「雪折れしないという柳」のように、強くしなやかに育てと願いながら、今年度もあとわずか、子ども達が残り少ない日々を充実して過ごしてくれる事を願ってやみません。

最後に、卒園児の皆さん、たくさんの思い出を今年もありがとう。

この幼稚園からいつまでも、いつまでも応援しています。

巣立っていく園児達だけではなく、これから学童期を経て

やがて大人になっていく園児を見守る、お父さん、お母さんに対して

共に、どこにいても最強の応援団であり続けたいと願っています。

いつまでも、どこにいても、この幼稚園から大きなエールを送り続けています。

翼が折れそうになったらこのゆりの樹幼稚園の事を思い出してください。

そして、いつでも私達に会いに、そうさんの待っている玄関をくぐりにきて下さい。

又、ここでお会いしましょう。幼い頃の陽だまりを浴びながら・・・

ただいだけで



あなたがそこに ただいだけで
なんとなく その温の空気が
あかるくなる

あなたがそこに ただいだけで
みんなの顔がほころぶ



あなたがそこに ただいだけで
みんなの顔がやすらぐ

そんなあなたに
わたしなりだい



相田みつを 作

これからも、「**ゆりの樹幼稚園**」を応援、見守って下さいますようお願いして最終号と致します。長い間ありがとうございました。そして、これからも宜しくお願い致します。